

1 はじめに

特別支援学校の現場では、「できました報告の指導」が広く行われている。

それ（報告）ができるかできないかにかかわらず、児童生徒の活動を教師が評価しようとするときに、評価の前に「でき……？」と水を向けて「ました」と言わせてから「ハイよくできました！がんばったね！マルです！」と評価する場面を目にする。もし「ました」が言えない場合は、「できまし」まで教師が分担して「た」だけを児童生徒が言ったり、教師が「でーきーまーしーたー」と言うのに合わせてコクンコクンと頷いたりしている場面も目にする。

この指導（報告しなさいという指示）を継続している限り、「できました報告」は身につかない。

筆者は、何らかのスキルを「身につける」とは、教師が存在しない環境（卒業後など）で、必要に応じて自発的にその行動が生起することであると考える。その背景となる重要な要素が、その行動の意味の理解と、モチベーションの有無である。

「でき……？」と水を向けて「ました」と言わせる指導は、「でき」という先行刺激（S）に対して反射的に「ました」というセリフを言うという反応（R）を条件づけた過ぎない。これを「S-R できました」と名付ける。これは、生徒の側に「できたことを先生に報告したい」というモチベーションが伴っていないし、報告することの意義も感じられないため、きっかけ指示がなくなると「できました報告」が生起しなくなる。つまり、「できました報告」を身につけるためには、表面的に「できました報告」を「させる」指導は逆効果であるといえる。

仮に「S-R できました」が指導の途中経過であるとしよう。この場合、「S」をどのように取り除いていくのかを考えなければならない。誰かからの指示がある条件でその行動ができるようになったら、指示がない条件でもできることを目指したい。

これは、「あいさつ」にも同様のことが言える。「(教師)おはようござい」「(生徒)マス」という指導や、職員室に入る際に「(教師)しつれい」「(生徒)シマス」（そして教師に頭を押されてお辞儀をする）も同様で、教師の強い先行刺激に依存することを教え、自発的なあいさつを身につけることから遠ざかる。

その場を「とりあえずあいさつしたことにする」ことで取り繕ったり、明確な発語によるあいさつやきちんとした態度ばかりに拘泥したりせず、その子が自然にできる形態であいさつを交わすことで、あいさつすることの気持ちよさ・楽しさを先に感じられるようにしたい。

2 「できました報告」を自発するまでのステップ

(ア) 教師（大人）との信頼関係を強固にする（ステージ I から）

教師と児童生徒の間には、教える側と教わる側の地位の上下関係は確かにあるが、これを振りかざして「先生に報告しなさい」といった指導をすることは、報告する気持ちを萎えさせる。それよりも、「この人と喜びを共有したい」という気持ちを呼び起こすような存在であるほうが、報告しようとする気持ちを喚起しやすい。

まずは、教師が子どもにとって「報告したいと思える人」「喜びを共有したいと思える人」（信頼できる大人）であるかどうかを確認したい。こうした人に囲まれて育つことが、将来できました報告ができるようになる最も基礎になる。

(イ) 目的行動ができる (ステージⅡから)

自分の成功 (もくろんだ通りの結果が得られた) に満足感を感じた時、子どもは「できたー！」などと言う。誰かに伝えるというよりも、自己満足の意味合いが強い。主に、自分がやりたいと思ってやったことが成功した場面で発生する。明確な目的行動ができることと密接な関係がある。

特にステージⅡまでは、この意味での「できたー！」の喜びを十分提供したい。そこには、「報告」としての意味合いはない。この段階で「報告」を指導しても、本人にその意図がないため、いつまで経っても報告するようにはならない。逆に、喜びを味わっているところに「できましたは？」という声かけを行うことは、その人とできた喜びを共有しようとするモチベーションを低下させる。欲しいのは、やりたいと思える活動と、ともに喜んでくれる大人である。

指示されて (最悪の場合、脅迫されて) 従事した活動に成功しても、得られる喜びは少なく、ノルマを済ませた開放感の方が強く感じられる。興味関心を引く教材や場面設定、できそうだという見通しが立つ課題の提示が求められる。

この段階では、「できた！」という児童生徒の気持ちの動きに合わせて教師の方から積極的に肯定評価を提供し、「先生はキミの成功を嬉しく思っているよ」というメッセージを伝える。

(ウ) 自分の喜びを人と共有する (ステージⅢ-1から)

(イ) を繰り返し経験することで、自分の成功を他者と共有したり、認めてもらったりしたい、という気持ちが育つ。この気持ちが確かなものになると、「できた！」という発語と同時に認めてもらいたいと思っている人とアイコンタクトが発生する。自分がやりたいと思ってやっている活動の他に、他者から提供された課題に成功した場面でも発生する。三項関係の成立と密接な関係がある (自閉症児は三項関係の成立に特段の配慮が必要である)。

この段階で「できました報告」を課すと、次のような機序が発生する。実際の指導場面で「言わされてる感」が最も高いのがこの段階である。たとえば、4ページの漫画の如しである。(課題の達成→満足感・教師に認めてもらいたい気持ち→「できましたは？」(新たな課題の提示)→「で・・・できました (汗)」→「よくできました！」→「ふう、できましたって言えてよかった」)

ここでは、児童生徒の気持ちと教師の評価がズレてしまっている。課題の達成を共に喜んで欲しい、認めて欲しいと思っているにもかかわらず、これを無視して「できました報告」をしなさいという新たな課題を提示している。

(エ) 他人の期待に応えることに喜びを感じる (ステージⅢ-2から)

(ウ) を繰り返し経験することで、活動の成功よりも、他者の期待に応えられたことの方に満足感を感じるようになる。活動内容は自分がやりたい活動よりも、期待してくれている人がやってほしいと思っている活動になる。

ステージⅢ-2 以上で、高学年以上で、かつ発語に抵抗がないケースでは、「表面的なできました報告」が可能になる場合が多い。これは、「できたら『できました』と言いなさい」という行動を指示して、児童生徒がこれに従う、という「できました報告」である。本稿冒頭に例示したように、内発的な動機付けが伴っていないため、その場は表出されたとしても維持されにくい。また、児童生徒が成功 (完了) したことを教師は認知しているにもかかわらず報告を求める場合、「できました報告」が形骸化しており、児童生徒にとっての機能 (それを言うことで得られるメリットや満足感) が乏しい。

(オ) 注意喚起ができるようになる

(エ) の段階に達した児童生徒が、期待に応えられたことを評価して欲しいと思っている場面で、

何らかの理由で大人がそれに気づかなかっただろうであろうか。たとえば、他の児童生徒の指導にあたっていて。自分をみていてくれなかったとしたら。こうした場面で、「できました」と言うことで大人の注意を喚起することができたとしたら、その「できました」には注意喚起の機能が随伴し、その結果評価という期待通りの強化子が得られることとなり、本人のモチベーションに端を発する意味があるやりとりとして成立する。このことで、自分にとって必要な（評価して欲しい）場面で自発する可能性が出てくる。

形骸化した「できました報告」に注意喚起の機能を付加するのに有効なのが「寝たふり作戦」である。確実に達成できる課題を提示し、そのまま寝たふりをする。課題を達成しても評価が得られないという状況で、机の隅にさりげなく「できました」という札を設置しておき、その自発を期待する。もちろん、自発した場合は即座に（大げさに）反応して評価を行う。

(カ) 注意喚起から報告に移行する

注意喚起の意味での「できました」が定着してきたら、「寝たふり」はやめて、教師が起きているのに評価が発生しないという状況設定に移行する。(エ)の形骸化したできました報告と同じ状況であるが、注意喚起機能を経由することで、できました報告に内発的動機付けが伴うようになっている点が異なる。この時教師は、他児を指導したり記録をつけたりして、できたことに気づかないふりをする。この上々で「できました報告」が自発するのを待ち、自発と同時に評価（マルつけなど）する演出をすると、「注意喚起」から「報告」の機能に移行することができる。

(キ) 業務の一環としての報告ができる

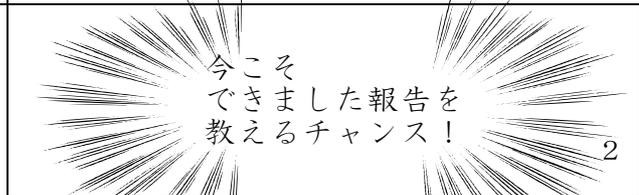
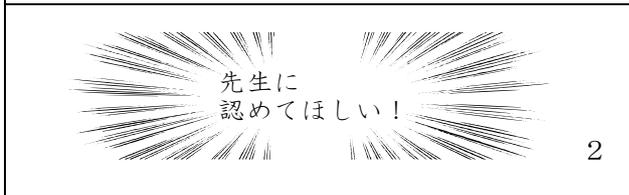
ビジネスマナー「報連相」の一つの「報告」。自分がチームの一員として役割分担を担っていて、自分の役割が完了したことを上長に報告するためのもの。「できました報告」の最終進化形。

この「できました報告」は業務の一環なので、相手がどんな上司であれ、しなければならない。その背景には、組織（上司と部下）や雇用関係（＝賃金）が存在する。こうした社会的な地位の上下関係が理解できるのは、ステージIVからである。それ以前の発達段階においては、(キ)の意味でのできました報告を課しても理解できないし、身につかない。

(ア)～(カ)は、コミュニケーションの指導のひとつと位置づけることができる。(キ)はコミュニケーションの指導は既に卒業した生徒が対象である。コミュニケーション指導は、コミュニケーションの相手方（教師）がどのような態度を取るかに強く影響される。教師は、児童生徒がコミュニケーションしたくなるような、できました報告をしたくなるような存在でありたい。

以上を一覧表にまとめると、次のようになる。

	小低	小高	中	高	できました報告習得までのステップ
IV	実態に応じて	推奨	何らかの形で必須		注意喚起機能がある報告から通常の報告へ
III-2	実態に応じて		推奨		他人の期待に応えることに喜びを感じる
III-1	お勧めしません		実態に応じて		成功の喜びを人と共有する
II	「できました報告」はやめましょう				目的行動ができる（成功の喜びを感じる）
I					教師との信頼関係を強固にする



直前の「課題の成功」を即時評価され、成功の喜びを共有できた。

直前の「課題の成功」は無視され、「報告」が新たな課題として提示された。

